

イーハトヴの不思議な世界

—その語りの構造—

宮 廻 和 男

1 はじめに

賢治は祖母の妹、堀田ヤソから<昔コ>を聞いた。尋常小学校3年のときには巖谷小波に熱中した。明治43年に刊行された『遠野物語』を読んだかどうかは定かではないが、大正9年に出版された「炉辺叢書」の『奥州のザシキワラシの話』(佐々木喜善)、『おとら狐の話』(柳田國男、早川孝太郎)には触発されたようである。翌10年に『どんぐりと山猫』、『注文の多い料理店』、『狼森と策森、盗森』などが執筆されていることも見逃せない。晩年には賢治は佐々木喜善の訪問を受け、昔話などについて語っている。

土地に生き、土地に死んだ賢治が、郷土の昔話を愛さなかったはずはない。幼い頃に聞いた<昔コ>はいつまでも賢治の耳から消えることはなかったであろう。

賢治の作品は何度読み直しても、われわれの心を魅了する。まるで<中毒>にかかった患者のように、飽きもせず彼の作品を読み返す。なにが作用して、この<中毒>症状を起こすのであろうか。これは、賢治の耳から消えることのなかった<昔コ>の響きが、彼の作品の中にも響いているからであると考えられる。本稿では、賢治の作品の構造を分析し、賢治の作品の根底に潜むものを明らかにしていくことにねらいがある。主題構成や文体論だけでは説き明かせない側面を考察することになる。

2 分析の方法

岩手の自然と生活をこよなく愛した賢治の作品が、昔話に特有なさまざまな特徴を備えていても不思議ではない。この点は高橋がすでに指摘しており、M.リュティの様式理論とYu.ロトマンのメタ言語的構造記述を利用

して分析を試みている(高橋 1989)。その分析によって、賢治の作品の記述レベルでの昔話との類似性、さらに空間構造の類似性が明らかにされた。そこから、「土俗的なものから自然のいのちを汲み、日本や西洋の昔話の基本形や発想法にそって話を築いていく」(高橋 1989: 181) 賢治の手法を論じている。

本稿では、高橋よりさらに深いレベルでの分析を試みたい。できる限り語りの構造の抽象度を高めて、作品の構成を分析するために、ここでは口承文芸の構造分析の手法を応用することになる。

口承文芸の構造分析は、70年代に大きく改善された。20年代にロシア・フォルマリストとその影響を受けた研究者によって口火を切られた、筋の<深層レベル>での分析は、50年代のV. Propp の紹介と Lévi-Strauss の神話研究を経て、60年代になってAlan Dundes, Claude Bremond, Elezar Meletinskijらによって大きく前進した。そこで、70年代にはGreimas, Maranda 夫妻そしてHeda Jasonらによって、いっそう抽象度の高い分析に仕上げられていく。Heda Jasonによれば、こうした構造分析(とりわけ, Propp, Dundes, Bremond, Jasonの研究)は、三つの<機能>と一つの<連辞>に還元される(Jason 1977)。この三つの<機能>はProppによる31の<機能>のうち、12, 13, 14番に相当する。

12 「主人公が(贈与者によって)試され・訊ねられ・攻撃されたりする。そのことによって、主人公が呪具なり助手を手に入れる下準備がなされる。」(贈与者の第1機能)

13 「主人公が、贈与者となるはずの者の働きかけに反応する。」(主人公の反応)

14 「呪具が主人公の手に入る。」(呪具の贈与・獲得)

この<機能>がひとつの<進展>をつくり、<連辞>によって<進展>と<進展>が結合されて、全体の物語を構成していくと論じている。Jasonの理論は大変複雑であり、本稿は彼女の理論の検証ではないので、詳しい紹介は小松1979に譲りたい。

さて、賢治の作品分析にあたっては Jason の理論に少し修正を施す。

大枠の概念を次のように設定する。

- 1 物語の基本単位は<動作主>(<主人公>と<相手役>) とその<行為>である。異なる<動作主>とひとつの<行為>が<機能>を作り出す。

- 2 <主人公>と<相手役>という<動作主>は、ひとつの<機能>の中では、<主体>と<客体>の関係にある。
- 3 <機能>は<進展>の中で、三つの異なる意味をもつ。
- 機能A <主体>の<客体>への<行為>
 機能B (機能Aの<行為>に対する)
 <客体>の<主体>への返答<行為>(肯定的/否定的)
 機能C (機能Bの反応<行為>に対する)
 <主体>の<客体>への反応<行為>(肯定的/否定的)
- 基本的な<進展>は以上の機能の連続からなる。
- 4 「動作主」はひとつの<進展>では、その属性を変化しない。別の変化に移行すると、その属性は変化しうる。この属性が「動作主」の具体性をつくる。
- 5 もうひとつの基本単位として<連辞>がある。
- a 情報伝達の<連辞>
 <情報1>は話中の人物どうしの情報伝達
 <情報2>は話中の語り手から聞き手(読者)への情報伝達
 <情報3>は作者から聞き手(読者)への情報伝達
- b 移行の<連辞>
 <移行1>は状態に関する移行
 <移行2>は時間に関する移行
 <移行3>は空間に関する移行
- 6 <機能>と<進展>のレベルで起こる可能性があるのは、
- a 任意の<機能>の省略(三つの機能が完全に揃うわけではない)
 b <進展>内への別の<進展>のはめこみ
 c <機能>、<進展>、<連辞>が、別の<機能>、<進展>、<連辞>を含んでいる重複など
- 7 ひとつの物語は、省略、挿入、重複などを行いながら、さまざまなレベルの<進展>が積分されて、<結合>によって連続されていく。主な修正は3番である。Jasonが<主人公>と<相手役>のinteractを設定したのに対し、ここでは<主体>と<客体>のそれにとどめた。物語の<行為>は必ずしも<試練>であるとは限らない。<情報3>も加えた。以上の方法を応用して、賢治の作品を分析してみたい。

3 物語の分析¹⁾

本稿では『イーハトヴ童話 注文の多い料理店』の分析を試みる。しかしながら、字数制約があるので、本稿中では全作品の分析を紹介できないことは了承されたい。

『イーハトヴ童話 注文の多い料理店』に収められた作品中で、多くの研究者、批評家に取り上げられ、また多くの人々に愛されているのは『どんぐりと山猫』であろう。山猫から手紙を受け取ったかねた一郎は、返事に応じて「だれがいちばんえらいか」というどんぐりたちの裁判に出席する。かねた君は裁判の調停を行い御礼を受け取るが、二度と山猫からはがきは届かない。高橋が指摘しているように（高橋 1989：178）、この物語は〔現実界〕→〔異界〕→〔現実界〕という構成をなしている。しかも、〔現実界〕→〔異界〕の行程は栗の木、滝、きのこ、栗鼠の助言で足をを進め、〔異界〕→〔現実界〕は〔異界〕の住人の援助で一瞬にして移動する。このような空間構成自体、たしかにヨーロッパの昔話的な構成であるといえよう（昔話の空間構成については宮廻1990を参照）。

この物語の構造を分析すると、枠組みとなる〈進展〉は；

	(主体)	(行為)	(客体)
機能A	山猫	裁判の依頼をする	一郎
機能B	一郎	依頼に応ずる（肯定的）	山猫
機能C	山猫	御礼をする	一郎

この枠組みの〈進展〉のなかに、さまざまな下位的〈進展〉が挿入されて物語が構成されていく。実は、この枠組みそのものも、典型的な昔話のパターンとして読み取ることができる。Proppの〈機能〉に従うと

機能12 山猫（贈与者）は一郎（主人公）に試練（裁判の依頼）を課す

機能13 一郎は山猫の依頼に応ずる

機能14 一郎は黄金のどんぐりを得る

もう少し詳しく分析を施してみると、物語の〈進展〉の連鎖がわかる。

（表1参照）

この物語は、前述のように〈進展1〉が枠組みとなり、その中にさまざま

まな<進展>が挿入されて構成されていく。かなりきれいな形で、繰り返しの手法が取り入れられていることがわかるであろう。<進展2>の繰り返しは昔話によく見られるパターンで、例えば「舌きり雀」で、爺が馬洗いどんや牛洗いどんのもとを経て舌切り雀のお宿に到達することがある。この場合、昔話では「難題」が課されて、それを解決しなければならないが、賢治の物語には描かれていない。

同種類の<進展>を積み重ねることで(<進展4>と<進展8, 9>), 昔話と同じ様なリズム感が生まれているのである。この昔話型のリズム感こそ、賢治の物語を支える重要な要素ではないだろうか。

次に『狼森と笹森、盗森』を分析する。この物語は導入の<進展0>と枠組みとなる<進展1>(主体-農民, 客体-森)から構成されている。

(表2参照)

この作品でも、同種類の<進展>と繰り返しを巧みに取り入れて構成されていることがわかる。<進展3>, <進展6>, <進展10>は全く同一の機能を備えており、昔話と同様に3回の繰り返しを描いている。さらに、<進展11>のような3回の繰り返しは、順を追って次の<進展>に移っていく手法で、昔話の手法に合致する。<進展13>も見事に繰り返しの手法が活用されている。そして、枠組みの<進展1>中に、<進展2>(狼), <進展5>(山男), <進展9>(盗人森)の大きな3つの<進展>が挿入されて、ひとつの筋を作り上げている。

4 まとめ²⁾

口承文芸の分析を目的とする方法で(わずかに修正を施しているが), 賢治の作品が読み取れるのは実に興味深い。本稿中ではわずか2例を示したにすぎないが、『イーハトヴ童話 注文の多い料理店』の他の作品にも同様な構成が認められる。先に論じたように、枠組みとなる<進展>の中にさまざまな<進展>が挿入され、さらにその中に別の<進展>が挿入される構成は、<進展>の連続を作り、話に「流動性」を与える。このような「流動性」は昔話にも認められるものであり、われわれが賢治の作品に

魅了される要因がここにもあると考えられる。表層レベルでの、賢治の独特の言葉使い、自然と一体となるような描写は、もちろんわれわれを捕えて離さない。しかし、表層には現れない、このような基層レベルにも仕掛けがあるといえよう。

賢治が昔話を意識して、これらの作品を執筆したとは考えられない。賢治の心の奥底で響く〈昔コ〉が、無意識のうちに表出したのであろう。深層の世界が無意識のうちに織り込まれることによって、賢治の世界はいっそう魅惑的となっている。「書かれた」世界が、実は「語られた」世界と表層一体となっていて、われわれは「書記」文芸と「口承」文芸の狭間を賢治の作品に見ることが可能になる。従って、賢治の作品は「文字」だけでなく「音声」も重要な要素になってくることは明らかである。

そして、賢治の独特の世界は、その『童話』を『児童文学』に限定することなく、もっと広く認識されるべき万人の文学へと導いているのではないだろうか。

(89. 12. 24)

(付記)

いろいろと助言や資料をお送りいただく Heda Jason 博士には記して感謝する。日本の出来の悪い semiotician は、博士の期待に反して今回も外国語で論文を執筆できなかった。

註

- 1 テキストは筑摩書房版『校本 宮澤賢治全集』に拠る。なお分析表中、3Aとある場合は3番目の〈進展〉の機能Aであることを、4A₁とある場合は4番目の〈進展〉の機能Aが数回繰り返されるうちの初回であることを示す。〈主体〉と〈客体〉が異なっても、〈行為〉が同一で連続するときは、同じ〈進展〉の繰り返しと考える。機能Aが1回しかなくても、それに対応する機能Cが複数であればnC₁、C₂として表記される。その逆の場合もありうる。〈進展〉の挿入によって、〈進展〉の順序が前後する。つまり、〈進展8〉の途中に〈進展9〉、〈進展10〉が挿入されているならば、9A/B/C、10A/B/Cのあとに、8B、8Cが現れることがある。
- 2 このような『記号論』的な分析は、長所も短所も持ち合わせている。その点はスコールズの『記号論の楽しみ』(岩波書店)あたりを参照されたい。

引用文献

- Jason, Heda
1977 A Model for Narrative Structure in Oral Literature in *Patterns in Oral Literature*, ed. by H. Jason and D. Segal. 99-139. Mouton, The Hague.
- 小松 和彦
1979 「昔話の形態論的研究」日本昔話大成 第12巻（研究編）123-146頁 角川書店.
- 宮廻 和男
1990 「昔話空間のトランスフォーメーション」記号学研究10（印刷中）
- 高橋 世織
1989 「語りものとしての宮沢賢治の世界」口承文芸の世界-日本とヨーロッパの昔話を中心に- 北海道大学放送教育委員会編 162-181頁 北海道大学図書刊行会.

表 1

（進展）（主体）／（客体）

	＜情報 3＞	手紙の到着
1 A	山猫／一郎（裁判の依頼）	
1 B	一郎／山猫（依頼に応ずる）	
	＜移行 2＞	翌朝になる
	＜移行 3＞	谷川に沿った小道
2 A ₁	一郎／栗の木（道を尋ねる）	
2 B ₁	栗の木／一郎（道を教える）	
2 C ₁	一郎／栗の木（礼をいう）	
2 A ₂	一郎／滝	
2 B ₂	滝／一郎	
2 C ₂	一郎／滝	
2 A ₃	一郎／きのこ	
2 B ₃	きのこ／一郎	
2 C ₃	一郎／きのこ	
2 A ₄	一郎／栗鼠	
2 B ₄	栗鼠／一郎	
2 C ₄	一郎／栗鼠	

<移行3>

金色の草地

<情報3>

別当の様子

- 3 A 一郎／別当 (質問-山猫はいるか?)
3 B 別当／一郎 (返答)
3 C 一郎／別当 (返答)
- 4 A₁ 別当／一郎 (質問-はがきを見たか?)
4 B₁ 一郎／別当 (返答)
- 4 A₂ 別当／一郎 (質問-文章が下手だろう?)
4 B₂ 一郎／別当 (返答)
4 C₂ 別当／一郎 (喜ぶ)
- 4 A₃ 別当／一郎 (質問-字はうまいか?)
4 B₃ 一郎／別当 (返答)
- 4 A₄ 別当／一郎 (質問-5年生?)
4 B₄ 一郎／別当 (返答)
4 C₄ 別当／一郎 (喜ぶ)
- 5 A 一郎／別当 (質問-誰ですか?)
5 B 別当／一郎 (返答-正体を明かす)

<移行1>

山猫の到着

<情報3>

山猫の様子

- 6 A 山猫／一郎 (挨拶)
6 B 一郎／山猫 (煙草は断る)

<情報3>

どんぐりの登場

- 7 A 山猫／別当 (命令する)
7 B 別当／山猫 (従う)
- 8 A₁ 別当／どんぐり (静かにさせる)
8 B₁ どんぐり／別当 (静まる)
- 9 A₁ 山猫／どんぐり (なかなかほりを命じる)
9 B₁ どんぐり／山猫 (口々に反論する)
9 C₁ 山猫／どんぐり (静まるように叫ぶ)
- 8 A₂ 別当／どんぐり
8 B₂ どんぐり／別当

- 9 A₂ 山猫／どんぐり (なかなかほりを命じる)
 9 B₂ どんぐり／山猫 (口々に反論する)
 9 C₂ 山猫／どんぐり (静まるように叫ぶ)
- 8 A₃ 別当／どんぐり
 8 B₃ どんぐり／別当
- 9 A₃ 山猫／どんぐり (なかなかほりを命じる)
 9 B₃ どんぐり／山猫 (口々に反論する)
 9 C₃ 山猫／どんぐり (静まるように叫ぶ)
- 8 A₄ 別当／どんぐり
 8 B₄ どんぐり／別当
- 10 A 山猫／一郎 (調停を頼む)
 10 B 一郎／山猫 (意見を出す)
- 11 A 山猫／どんぐり (裁判する)
 11 B どんぐり／山猫 (静まる)
- 10 C₁ 12 A₁ 山猫／一郎 (礼をいい、申し出をする)
 12 B₁ 一郎／山猫 (申し出を快諾する)
- 10 C₂ 12 A₂ 山猫／一郎 (礼をいい、申し出をする)
 12 B₂ 一郎／山猫 (申し出を拒否する)
- 1 C 12 C₁ 山猫／一郎 (黄金のどんぐりを渡す)
- 13 A₁ 山猫／別当 (命令－黄金のどんぐり)
 13 B₁ 別当／山猫 (従う)
- 13 A₂ 山猫／別当 (命令－馬車)
 13 B₂ 別当／山猫 (従う)
- <移行 3> じぶんのうちの前に戻る
 12 C₂ 山猫／一郎 (はがきを出さない)

表 2

	<情報 3>		森の由来
0 A	農民／森	(耕す許可を請う)	} 4 回の繰り返し
0 B	森／農民	(許可する)	

- <情報3> 懸命に働く農民
 1 A 農民／森 (懸命に耕す)
 1 B 森／農民 (豊作をもたらす, 農民を保護する)

- <移行2>
 2 A 狼／農民 (子供をさらう)
 3 A₁ 農民／森 (叫ぶ)
 3 B₁ 森／農民 (答える)
 3 A₂ 農民／森 (探索を告げる)
 3 B₂ 森／農民 (許可する)
 3 C 農民／森 (探索する)

- <移行3>
 <情報3> 踊る娘
 2 C 狼／農民 (子供に食べ物を与え, 危害は加えていない)
 4 A 農民／狼 (子供を返せ)
 4 B 狼／農民 (子供を無事に返す)
 4 C 農民／狼 (御礼)

- <移行2>
 5 A 山男／農民 (農具を盗む)
 6 A₁ 農民／森 (叫ぶ)
 6 B₁ 森／農民 (答える)
 6 A₂ 農民／森 (探索を告げる)
 6 B₂ 森／農民 (許可する)
 6 C 農民／森 (探索する)

- <移行3>
 7 A 農民／狼
 7 B 狼／農民
 <移行3>
 <情報3> 山男
 5 B 農民／山男 (盗人を発見する)
 5 C 山男／農民 (農具を返す)
 8 A 山男／農民 (粟餅を要求)

<移行3>

- 8 B 農民/山男 (粟餅を与える)
7 C 農民/狼 (粟餅を与える)

<移行2>

- 9 A 盗人森/農民 (粟を盗む)
10A₁ 農民/森 (叫ぶ)
10B₁ 森/農民 (答える)
10A₂ 農民/森 (探索を告げる)
10B₂ 森/農民 (許可する)
10C 農民/森 (探索する)

<移行3>

- 11A₁ 農民/狼
11B₁ 狼/農民

<移行3>

- 11A₂ 農民/山男
11B₂ 山男/農民

<移行3>

- 11A₃ 農民/黒坂森
11B₃ 黒坂森/農民
11C₃ 12A 農民/黒坂森 (御礼)
12B 黒坂森/農民 (御礼拒否)

<移行3>

- 9 B 13A₁ 農民/盗人森 (粟を返せ)
13B₁ 盗人森/農民 (証拠がないと拒否する)
13A₂ 農民/盗人森 (証人がいる)
13B₂ 盗人森/農民 (吠える)
13A₃ 農民/盗人森 (証人を示す)
13B₃ 盗人森/農民 (どなる)

<情報3>

①農民が恐れる②岩手山が犯人を告げる

<移行3>

- 9 C 盗人森/農民 (粟を返す)
1 C 農民/森 (四つの森に粟餅の御礼をする)

<情報3>